

鈴木商店掲載記事

▽：このほど九十億円の巨費を投じて神奈川県川崎市に食品の新工場を完成させた日本油脂の中嶋洋平社長。「日本で、たぶん最も生産性の高い工場」というほどの自信作だ。危害分析重要管理点(HACCP)に完全準拠した最新工場で、マーガリン工場の要ともいえる練り工程には最新の機器を導入。また食品研究所と製菓・製パン試作室であるベーキングラボも併設している。

▽：日本の加工油脂マーケットは現在、縮小傾向にあるものの、技術力で付加価値の高い製品を送り続ける同社のシェアは増勢基調にある。「食品事業は当社の前身である鈴木商店が大正六年(一九一七年)に創業して以来の基幹事業。そして、これからも基幹であり続ける」。新工場建設は、食品事業を「基幹中の基幹事業」と位置付けた宣言でもある。

(化学工業日報 平成16年7月14日)より転載



景気の回復を反映して、企業の倒産が減っている。結構なことだ。中小企業の倒産では、債務を連帯保証している経営者などが、裸になっても返せないほどの借金を背負い込む場合がある。再起できるようなシステムが早急に欲しい。

▼しかし市場経済である以上、「倒産」自体は無くならない。残念ながら必要悪とも言える。森林について「更新」と言えば、若木が古木と置き換わることを意味する。鬱蒼とした森では、種が落ちて芽生えても日光が不足して枯れてしまう。寿命の尽きた大木が倒れて初めて、日が差し芽が育つチャンスが生まれる。

▼倒木は土に返り、次の世代の栄養分になる。絶えず繰り返される更新によって、天然の森は成り立っている。経済も似ている。倒産しても、すべて無に帰すわけではない。歴史を振り返れば、戦前の鈴木商店の例がわかりやすい。第一次世界大戦のブームに乗じて急成長し、戦後の反動で破たんして消滅した。

▼だがその流れをくむ企業が今もいくつもある。神戸製鋼所、帝人、石川島播磨重工業、双日ホールディングスなどがそれだ。鈴木商店の大番頭金子直吉が全盛期に作った俳句に「初夢や太閤秀吉奈翁ナガレオウ」というのがある。氣宇壮大なのか誇大妄想なのか。夢破れ七十七歳で寂しく亡くなったが、遺したものは大きい。

(日本経済新聞 平成16年10月16日)より転載

講演

金子直吉翁を語る

森本準

ただいまご紹介を蒙りました日本エヤーブレイキの会長森本でございます。小野総務委員長から私の体験を話せというお言葉であります。が、小さい私の体験を話すよりもっと偉い人の話をした方が面白かろうと思っておりますので、私の尊敬しておりました鈴木商店の大番頭さんの金子直吉翁のことについて、ひとつ漫談的にお話をいたしたいと思います。昨年の春、兵庫新聞社で松方・金子物語という本を出されております。その本は神戸の実業界が生んだ偉い二人の生涯のこと、その外について非常に面白く書いている。私は鈴木商店に入りましたのが大正十二年の関東大震災当日であります。鈴木商店が破綻した昭和二年までお世話になって、その後神戸製鋼所に移りまして、昭和三年から昭和十九年に金子さんが七十九歳で亡くなるまで、しばしばお目にかかってお話を伺ったのであります。それで「松方・金子物語」に書いてないことも加えて皆さんのお耳に入れたいと思えます。

一、金子直吉翁のユーモア

金子さんは人物も識見も非常にすぐれた方でありまして、いろんなことをなされておりました。一面にまた非常に話上手でユーモアに富

んだ方でありました。ユーモアに富んだお話を一つ二つしますと、金子さんは非常に大食をされる方で、宴会とか、あるいは一緒に飯を食べにまいりまして、果物でも何でも、出してあれば人のものでもムシャムシャ食べておられる。大変健啖家ですねといいましたら、神戸には昔、大食会というのがあった。ある日スズキ(鱸)を出されたが、僕は大きなスズキを三尾食べたので、皆が驚いた。ところがその時一人口の悪い人がおつて「金子がスズキを三尾や四尾平らげるのは何でもない」ということをえん曲にいったことでもあります。それからこれは皆さんにも応用のできる話と思いますが、あるお正月に金子さんのお伴をして室屋に行きました。そこに年増の芸者がおりまして「金子さん、お約束のものはもう出来ましたか」と、こういう。金子さんは「うん、忘れちゃおらん。まあ帯だけというわけにはいかんから、羽織もと思つて蚕を飼うちよる。それも近いうちにとれると思うが、帯も羽織もということになると、ついでに箆筒も揃えてと思ひ、桐の木を植えておいた。ところが残念ながら虫が食いよつた。それでまた桐の木を植え変えておるから、それが役に立つまでもう暫く待つてくれ。」こういうことでもあります。芸者の方では「羽織もありません。箆筒にも及びません。帯だけでいいから早くして下さい。」「いや、長年お世話になったんだから帯だけで済ませるわけにはいかん。ついでに羽織も箆筒もそろえてやるから待つてくれ。桐が大きくなるまで待つてくれ。」ということでした。私はその当意即妙の応酬に感心した次第であります。

そういうようなユーモアに富んだお話も多かったです。



昭和41年5月 勲三等瑞宝章 森本準一(78歳)

二、台湾銀行の倒産

鈴木商店が非常に盛んな時代、これは第一次大戦が始まって後のこととありますが、鈴木商店が支配しておる会社が五十いくつありまして。そうして取り引き高は優に三井、三菱と比肩できるところまでいっておったのでありますが、一九一八年に休戦条約ができてからだんだん左前になり、昭和二年の二月に鈴木商店が破綻の憂目にあつたのであります。この時私は経理第一部長という名前をもらつておつたのであります。実際の経理は大塚清二君が経理の第二部長、そうして現在、三菱レーヨン社長の賀集君が課長をやつておりました。その時台湾銀行が鈴木商店に融資した額が三億五千万円、その時の日銀券の発行高は十二億に足りないと思つております。今日、日銀券発行高は一

兆円、多い時には一兆二千億円というような額にのぼつておりますから、その三億五千万円を今日の額に直しますと三千億円以上になっておると思ひます。当時台湾銀行の払込済資本金はいろんな政治的事情もありましたが、とにかく四千万円というような資本金で、しかも非常に預金の少ない台湾銀行が一会社に対して三億五千万円もの融資をするということは、まことに無理なことであります。台湾銀行が遂に破綻を来たしたのも、これは当然の成り行きといわざるを得ないのであります。台湾銀行が何故そんなにやつたか。政治的事情もあると申しましたが、その時に聞いておりましたのでは、大正天皇ご不例の際に日本の財界に大動揺を起こすようなことがあつては相済まんから、兎も角つないで行けというような話で、一銀行のやるべきことではない、銀行業務の範囲を逸脱しておるといふような議論が沸騰しまして、銀行の内部も非常に揉めたのであります。遂にこういうことをやらざるを得なくなつたわけであります。

三、翁の尊敬する人

大体、鈴木商店のことはそれぐらいにいたしまして、金子さんという人はどういう人物が好きであつたかと申しますと、金子さんが私に、南北朝以後群雄割拠時代を通じて足利尊氏が一番偉いように思う。というのは新田義貞に京都で敗れて沢山の捕虜を出し、自分は身をもつて九州に逃れたのであるが、その尊氏は忽ち九州から数万の兵を率いて、海陸両方から兵庫に押し寄せてきた。関東の方は源氏の支配下にありましたが、九州の方面はそう縁の深いところではなかつた。尊氏

が九州の方へ行つて、忽ちのうちにそういう沢山の味方を作り得たということ、尊氏が当時としては非常に経済に通じておつた。また身を持することが堅くて論功行賞に当を得たことに帰すると思ふ。それから近頃では杉山茂丸という人がおるが、これがまた偉い。この人は朝鮮の合併を画策実現した陰の人である。寺内さんの参謀になつて、あの日韓合併を実現したまことに偉い人であつた。また日本産業発展のためには興業銀行の設立が急務であることを提唱しその実現を図つたが、その規模が杉山の計画の十分の一にも足りない小規模に縮小せられて中途半端なものになつたのは残念である。この杉山が、このころ金子は少しも来ないじゃないかといつておるといふような話は何処からともなく伝わってくるので、どうしてもご機嫌伺いに行かざるを得ないようなことになる。ご機嫌伺いに行く時には土産を持って行かなければならぬ。また暫く経つと、このころ金子は少しも来ないじゃないかといつておるといふことが何処からか伝わつてきて、また行く。また土産を持って行く。そういうことを何回も繰り返しても一回もお礼をいふことがない。この人は実に偉い。私には怖い人です。こゝういつておられました。あの金子さんが、偉い、怖いという言葉を使われるのは滅多にないのであります。それから考えましても杉山茂丸という人は実に偉かつたのではないかと思ひます。

金子さんはそういう人物評論を私になさいました。

四、経済野話

また金子さんの経済論の一端を申し上げますと、金子さんの談話を、

ただいま呉造船所の社長をしております住田君が筆記したのであります。経済野話という本があります。や話というのは大体何々夜話とかいつて夜の話を書くのが普通であります。金子さんになぜ「野」という字を使ったんですかとときくと、それは野人が話すといふことで経済野話という題目が付けられたんだ。その中に金利引き下げ論というのがあります。ちょうど松方さんと金子さんはその時借金をして、金利の支払いに困つておられた。どうしてもこれは金利を下げてもらわなければやりきれんといふので、松方さんと金子さんが相談をされて作られたものであります。その金利引き下げ論にこんなふうにしてあります。金利が高いと生産費が高くなる。生産費が高くなれば物価は上る。物価が上れば買手が少なくなる。買手が少なくなれば生産が減ってくる。生産が減れば失業者が増える。失業者が増えれば社会は不安になる。反対に金利が下がれば生産費は安くなる。生産費が安くなれば物価は下がる。物価が下がれば買手が増える。買手が増えれば生産が上る。生産が上れば失業者は少なくなる。失業者が少なくなれば国家は安泰だ。だから速やかに金利は引下げなければならぬという結論であります。立案当時金子さんはそれを神戸大学へ行つて、先生方を集めてこの論を強調しようと思つておるとのお話でありましたが、金子さんの講演会は遂に開かれませんでした。その後私は大学の先生に、金子さんがこういうことを書いておられるが、あなたはどう思ひますかといつたら、面白いですよ、面白いですが論理の飛躍があります。といつておられた。その時に金利はおおよそ二銭八厘から三銭ぐらひでありましたから、三億五千万円借りておれば

年に三千五百万円、三千五百万円という一カ月に大まかに見て三百万円、毎日、土曜でも日曜でも祭日でも十百万の金利がかかるわけでありますから、川崎も鈴木もその負担に耐えられなかった。利益はそれだけ上るものではありません。今日の金に直しますと、銀行券の発行高は約一千億になっておるのでありますから、今日の物価指数に直しましたら大変なものになります。

五、実現をみなかった大構想

次に金子さんがどんなに大きな考えを持っておられたかということをお話し申し上げます。戦争中のことでありましたが、神戸製鋼で高炉を設けようというのでその敷地を物色して来いということで、私は金子さんのところへ参り、今度製鋼所で製鉄工場をこしらえたいということ敷地を物色しようと思うが、何処がいいでしょうかと質問いたしましたら、金子さんは、それは結構な話だと直ぐ立ち上がって、部屋に掲げてある日本の地図を指しながら、土地としては瀬戸内海の沿岸がいいだろう。西の方からいうと長府がいい。長府には三万坪ばかり鈴木商店が埋立ての権利を持っておりました。その次は三田尻がいいだろう。それから東へ行つて徳山がいい。徳山は海が深いから大きな船が入る。それから東の方では柳井。柳井にも鈴木商店が埋立権を持っておった。それから東は岩国がいい。その次は広島県の太田川の下流がよろしい。それから岡山県に入つては児島半島にいいところがある。それから岡山県と兵庫県の境にいいところがある。それから東は相生の造船所がある。それからさらに東は飾磨がいいぞ。

りますが、来年度になつたらまだひどくなります。更に将来播州に工業地帯が出来ました時には、播州の方面から大阪まで大きな荷物をどんどん運ばなければならぬ時代が来ましょう。どうしてやつたらいいか。金子さんが運河の計画をいつておられたのは、いまから三十年も前の話であります。その時にもしてきておったならば、これはあの交通を緩和することおびただしい。先見の明があつたといえますか、金子さんの考えは何時我々より数十年ぐらい進んでいました。金子さんの構想は遂に実現しなかつたのであります。これは私は、どうしても大阪と西の海の方と、近い将来、海上トラックというようなものを設けて播州の方面、神戸の方面から、小さい非常に能率のいい、トラックに代るような五百トン内外の船を沢山造つて運ばなければ捌きがつかないというような時代が来るんじゃないか。今日大阪へ持つて行くのは大回りをしなければなりませんけど、これだけの静かな海があるのでありますから、海を利用するということが遠からず実現することだと思ひます。運河が無いということは、運賃の点からいひましても甚だ惜しいと思うのであります。金子さんは常にそういう大きな考えを持っていろいろ研究しておられました。金子さんの考えられたことが極く僅かしか実現しなかつたことは、非常に残念に思うわけがあります。

六、日本の危機を救う

また金子さんがやられたことで、皆さんのご記憶にもあると思うのであります。第一次大戦中に船鉄の交換ということをやりました。

さらに東へ行くとき三菱さんと川崎さんがナワを張つておられるから、その辺は手が付けられんが、脇浜はいい。その次は尼崎の方面がよろしい。さらに東へ行けば浜寺の方があられるけれども、あそこは淀川の砂が流れてきて年々浅くなるから、あの方へ工場を造ると浚渫に費用がかかつて具合が悪い。それから堺の方。和歌山にもいいところがある。瀬戸内海では大体そのぐらいいだ。四国、九州へ海を渡つて行くということは大変なことだからこの次だ。強いて求めれば四国に西条がある。九州には苅田がある。まあそのぐらいいで、これは皆自分の方で調べたんだけれども、神戸製鋼でも早くそいつを調べてそれらの土地は皆買うときなさい、といわれた。

神戸製鋼の力を考え、金子さんのいわれることを考えあわせると、余りに大き過ぎて、私は茫然としたことがあります。金子さんはそういうような人でした。さらに抱負の大きいことを申しますと、金子さんは満州の開発には、ウスリーのあの大きな河の水を日本海へ流すのは惜しい。奉天からこの河の水をとつて運河をつくり営口の方へやれば、灌漑用の水は充分あるし、非常に便利になってくる。そういう考えを持っておられた。また北支の方では天津から塘口まで運河を造つてはどうか。

なお国内では尼崎から大阪市の中央に向かって運河を掘つたらよろしい。いま船はずつと大回りをして大阪の方へ入っている。これをまっ直ぐに大阪の中心にもつて行く。こういうような意見も持つておられた。このごろ大阪へ自動車でまいりますと、ゴーストアップ、ゴーストアップで実に車が輻輳しておつて、時間のかかることおびただしいのであ

それは戦争が終盤に近づきましたところ、アメリカもイギリスも非常に鉄が不足して悩んでいました。このため鉄の輸出を禁止したのであります。そのために日本は非常に鉄の飢饉になりました。一般産業が殆ど行き詰まりを来たしたのであります。それで日本の工業界では大変困りまして、神戸では松方さん、金子さんが、どうしてもこれは鉄を日本に送つてもらわなければ、日本の産業は全滅するというようなことで、知恵をしばられたのが、アメリカとの間に船鉄の交換ということでした。

これは鉄三トン持つていらつしやい。そうすれば、あなた方が困つておる船を二トン供給しましょう。一トンはこつちへ使わせてもらいたい。尤も鉄二トンあれば船は二トン以上できる。そういう契約が出来まして、日本の産業は救われたのであります。この船鉄交換契約について面白いことが一つあります。それはいよいよ交換契約の調印ということになりました。まさに調印の準備にかかつておる時に、金子さんが突然向うの大使に、政府との契約に保証人を立ててくれといひだしました。当時のアメリカ大使はモリスという人でありました。この人はアメリカで弁護士をやつておつて、いろいろ財界の事情なんかに通じておられたそうであります。大使も大変困りましたけれども、この契約はどうしても成立させなければいけないというので、金子さんに、だれを保証人に立てたらいいのかといつたら、ナショナル・シティ・バンクを保証人に立ててもらいたいというので、大使は本国へ要請をしまして、とうとうナショナル・シティ・バンクを保証人に立てた。

金子さんの言い分は、政府との契約ではお役人が代われれば方針も変わってくる。だから民間の保証人を立てて貰いたい。民間のものは代わらないから安心だというので、政府との契約に遂にナショナル・シティ・バンクを保証人に立てたのであります。外交交渉も色々ありましようけれども、政府の契約に民間の保証人を立てるということは、恐らく空前のことではないかと思うのであります。

七、樟脳専売制を建言

それから金子さんは、非常に後藤新平さんに信頼の厚い方であったのでありますが、後藤さんといえば台湾を思い出し、台湾といえば樟脳のことを思い出すのであります。樟脳の事業は台湾総督府としては大きな事業であるに拘わらずどうも巧いかない。どうしたらいいだろうかというようなことを、後藤さんから相談を受けたので、金子さんはそれはいい案がある。専売にしたらいい。こういつて樟脳の専売制度というものは金子さんの建言によって出来、鈴木商店自体も樟脳についていろいろな特権を得ました。こういうことも金子さんのひとつの仕事として残っておるわけでありす。

八、功罪相半ばす

それから鈴木商店が潰れたあとに、東京へ参りましたら、ある偉い人が私に鈴木商店が潰れたというけれども、金子さんがやった仕事は永遠に残っているよ。金子君も以って瞑すべしだねと言われました。それでそのまま率直に金子さんに申しましたら、金子さんは、世の中

には功罪相半ばすということがある。明治、大正の産業革命は、第一に発動機の発達、第二は人造繊維の発明、第三番目には肥料の変革から起こった。この発動機の発達ということは、今日からいえばスピード時代に入ったということ。スピード時代に入ったということは発動機が発達したからだ。これは神戸製鋼所でやらしておる。人造繊維の発明とは、人絹であります。これは帝国人絹。肥料の変革ということクロード式窒素肥料製造のことである。

この三つは何れも鈴木商店が先鞭をつけた故に明治、大正の産業革命は、源を鈴木商店に発しておるといっても過言ではない。しかし、それが為いろいろな失業者が出ておるが、発動機の発達によって人力車は無くなる。小さい舟も製造しなくなる。人絹の発達によって天然絹糸の価格は下がってきた。養蚕、製糸業者はそれがために倒産をしてきた。窒素肥料が出来たために農家は助かっておるけれども、その他のニシンとか何とかいうような、いろんな今までの肥料をやっておったものは、それが為失業者、倒産者も出る。鈴木商店がやった功罪については、後世史家の判断に待つ外ない。こういうようなお話でした。こういうようにいろいろな仕事を考案し、いろんな仕事を実施されて、大変に日本に功績を残された人ですが、一面には今いったように罪を作ったというようなこともあるというお話をなさったこともありました。

九、世に出なかつた興亡史

金子さんは非常にお話の上手な人でありますから、鈴木商店破綻の

ことについて、あなたから直接、鈴木商店興亡史というようなものをお話くださるならば、政治家も銀行家も経営者も非常に参考になる話が多いからお話願えませんかというところ、そんなことを話すと差し障りがある。現に神戸製鋼所の三十年史に載せた話も半分以上削ってしまった。田宮さんが、こんなことを載せたら神戸製鋼所は困る。と削ってしまった。だから生きておる人に関係あることは、わしは話さない。いや、そんなことはいわないで、あなたがいわれたことはあなたのお目にかけてから、一ヶ月分ぐらいづつ雑誌に載せて、みんなの参考にしたからということ話で纏まり、準備でき次第、私の方に速記者がおりますし、私自身も一週間に二時間ぐらいは、あなたのところへ来るからよろしく、ということでありましたが、その後金子さんが怪我をされて、それなりになりました。

今日鈴木商店興亡史というものが金子さんの口から聞けないことは、非常に残念なことであります。それがもし金子さんの口から聞けたら大変面白い、われわれの参考になることが多いと思うのであります。大体このぐらいなことで私のお話を終わります。

寸談

金子さんの話

私は金子さんと安東君とに連れられてよく食事に出た。昼は向い側の中華料理、夜は県庁裏の「たからや」に行くことが多かった。食事

中、話上手の金子さんからいろいろ面白い世間話や冗談をよく聞いたものである。

心気転換の方法

金子さんは随分多忙で心労の多いお人であつたが、別にこれという運動もせずお酒を飲んで遊ばれるようなこともなかつたので、どうして心気転換をされますかと尋ねたところ、それは愉快な夢を見ることだと言われた。

「今度はかくかくの仕事を始めよう。始めてみると大変巧いって立ち処に五十万、百万両と儲かつた。さらに百万両を投資して新しい仕事を起す。これも非常に順調に運んで四百万、五百万両の利益が出た。またこれを投資して新しい仕事を増やす。すると僅かの間に千万両儲かつた。愉快で、愉快でたまらなくなって飛び上つたら目が覚めた。大塚君が側にいて百万両の借入れはまだ話が出来ませんというので、アラッ今儲けたのは夢だったのかと気がつく。まあそんな風に愉快な夢を見ることが一番私の心気転換になる。」と、こういうお話してありました。(完)

(出典) 落穂集・森本準一の追想(昭和50年2月)を森本雄三

氏が平成16年10月、復刻・編集されたものより、講演

記録「金子直吉翁を語る」を転載しました。